

■グッド・イブニング America : 今どきの自己紹介

日本で自己紹介というと、社会人ならまず名刺交換だろう。でも米国では必ずしもそうではない。ちょっとした集まりやパーティーでは、まず「会話」から始まる。自分の言葉で自己紹介して、おしゃべりを通じて関心を持つと、話の終わりに「名刺ある？」と聞くことが多い。日本人の私には、これはちょっとつらい。会話で「面白くないやつ」と判断されると名刺をもらえなかったりするからだ。

だが、そんな自己紹介に新たな「名刺」が登場した。米国で生まれたソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）の「フェイスブック」や「マイスペース」である。これはいわばインターネット上に自己紹介のページのようなものを掲示し交流するサイトだ。最近、電話取材をした相手にやたらと「フェイスブックやってる？」などと聞かれる。米国では多くの利用者が実名で顔写真や連絡先、経歴や所属する会社、機関などの情報を掲示している。つまりネット上の名刺のような存在になっているのだ。

しかし、そう聞かれた私の返答はさえない。「うーん、どうしようかと思って」。日本語的にはこれは「あまり気が進まない」と言っているようなものだが、米国人からはたいてい「なぜやらないの!？」という驚きの反応が返ってくる。仕方なく「ちょっと実名は勇気がいるので」と本音をもらす。

先日取材したカナダの全国紙「ナショナル・ポスト」元編集長のマシュー・フレイザー氏インシールド大教授とも同じようなやり取りをした。ただ、フレイザー教授は世界各国のSNSについて調査し、日本の事情についても詳しく知っていた。教授によると「日本人は匿名でのやり取りが好き。韓国人は顔見知りの友達同士で交流する人が多い」そうだ。これに対して欧米系は「SNSは人脈を広げる道具という感覚が強く、ネットを通じて実名で積極的に新しい友達を作ろうとする」という。

郷に入っては郷に従え。米国で仕事をする以上、そこに根付く文化になじむことは悪いことではない。そう考えて先日、ビジネス向けのSNSに初めて参加した。米務省の報道担当から招待状が来ていたからだ。参加してみてびっくり。各国の記者のほか、米軍幹部らも登録していて、参考になった。名刺交換をする機会がないような人にもメールでアクセスできるのは、やっぱりうれしい。今度は取材先に「ソーシャル・ネットワークキングしてる？」と聞いてみようかな。